

# フーコー権力論と会計学説史

チョン          ジェ          ムン\*  
全                  在                  紋\*

## 1 はじめに

人間とは何か？ 「人間」に対する〈定義〉は、さまざまに考えられてきた。人間に対する古来の定義のうち、代表的なものとして、「ホモ・ロクエンス」(=コトバを話すヒト=アニマル・シンボリウム)がある。コトバを話すことが人間の証し、というわけである<sup>1)</sup>。

ただし、動物界における仲間同士のコミュニケーションで、コトバを用いるのは人間だけではない。イルカやハチなどは、ダンスをコトバにして仲間同士でコミュニケーションする。ゴキブリは、臭覚をコトバにして仲間同士でコミュニケーションすると言われている。

ただ、人間を除く動物界のコトバの特徴は、コトバとその意味とが「一対一の対応」(one-to-one correspondence)をなしているという点にある。すなわち、コトバの意味は、単数である。つまり、一義的である。

他方、人間という動物のコトバの特徴は、コトバとその意味とが「一対一の対応」をなしていない点にある。すなわち、コトバの意味は複数である。つまり、多義的である。たとえば、日本語の「はし」(/hasi/)というコトバ(音声)は、『端』の意味にも、『箸』の意味にも、『橋』の意味にも、あるいは『嘴』の意味その他の意味でも、用いられている。どの意味であるかは、「はし」(/hasi/)というコトバ(音声)と共に用いられる他の日本語との、関係(文脈)によって決まる。

言語学の領域では、コトバとその意味とが「一対一で対応」する、人間を除く動物のコトバを「シグナル」(signal)と呼ぶ。また、コトバとその意味とが「一対一で対応」しない、人

---

\* 本学経営学部教授

\* キーワード：ソシュール、勘定学説、フーコー、実証研究、言説

1) 丸山圭三郎、『カオスモスの運動』、講談社、1991年、213頁。

間という動物が用いるコトバを「シンボル」(symbol)と呼んで、区別することがある。

以上によれば、人間も動物界の一員として、そのコトバの中にはごく一部シグナルも存在する。しかし、およそ人間に特有のコトバは、どれもシンボル(＝一義的でない)であるということになる。多義的であるということになる<sup>2)</sup>。人間が用いる「会計」(accounting)というコトバの意味も、その例に漏れない。「会計」とは何か? 少なくとも2つの意味を含有している。

一つには、企業人の個人的な行為としてのアート(技術)を意味する。「会計とは、企業の経済的取引を記録・計算・報告するプロセスである」といった定義における含意である。それとは別に、他にもう一つある。「会計とは、〈企業の言語〉である」という定義における含意である。前者は企業人の個人的な行為としてみた会計の意味であり、後者は企業人相互間における社会的な機能からみた会計の意味である。

本章は、後者の定義をベースとした議論である。すなわち、会計を企業の言語と見立てての議論である。我われは、これまでソシユール言語学に依拠して、企業の言語としての会計に関する考察をいくつかのものしてきた。

本章ではむしろ、フーコー言説論に依拠して、企業の言語としての会計に関する省察を試みたい。フーコーによれば、知と権力とは一体であると見られている。ならば、権力変遷にともなう知識観の推移が、企業の言語としての会計に対する認識の変転と、どのように重なるのか。あるいは齟齬するのか。本稿はこれの究明を主題とする。

## 2 ラング(言語)とパロール(言説)

フーコーによれば、「知」と「権力」は〈一体〉であると見られる。ただ、その際、「権力」は〈所有〉の対象としてだけでなく、〈行使〉の対象として見られる時もある。我われは先ず、この点に留意しなければならない。

「権力者」というコトバの意味は、権力を所有する者ばかりではない。権力を行使する者の意味でもありうる。「金持ち」とは、一般に、大金の所有者と考えられがちである。しかし一方で、利己的ではなく、慈善事業など社会的に意義ある方法で大金を行使する者であつてこそ、真の「金持ち」と見る見方もある。

たとえば、アメリカなどにおいては、寄付をしてこそ、金持ち(富裕者)として社会的リスペクトを受けるといふ。また、飲食店にとって、「金持ち」とは、「大金の所有者」ではなく、むしろ「金払いのよい客」を指すことであろう。フーコーにおける近現代の権力観は、所有の

---

2) 丸山圭三郎、『文化=記号のブラックホール』、大修館書店、1987年、34頁、127頁。

対象としてではなく、行使の対象として「金持ち」かどうかを判断する、そうした見方に通脈している。

「コトバ（言葉）なくして認識なし。」これはソシユールに始まる言語観である。ソシユールの言語観は、フーコー言説論においても踏襲されている。コトバの意味として、「認識」と「知識」は重なる領域が大きい。じっさい、「認識」と「知識」は、同義で互換的に用いられる場合もめずらしくない。それゆえ、場合により、「コトバなくして認識なし」は、「コトバなくして知識なし」とも、読み替えが可能である。すると、フーコーにおいて「権力」と一体をなす「知」すなわち「知識」は、〈言語外存在〉よりも〈言語〉そのものの先在を必須条件にしていることとなる。

ソシユールもフーコーも、知識をもたらすコトバの意義について探究している。コトバ（以下、広義で用いる「言語」というタームで代替）とは、記号の体系である<sup>3)</sup>。記号の理論（記号論）は、別拙稿で述べたとおり、3分野あった。記号および記号のあいだの関係をあつかう構文論（syntactics）、記号およびその指示物（世界または「経験」——現実のまたは想像上の）への関係をあつかう意味論（semantics）、記号およびその使用者との関係をあつかう語用論（pragmatics）である<sup>4)</sup>。

現代言語学の知見では、人間の言語システム（言語体系）は、どのシステムであれバイアス（偏見）の包蔵が不可避である。実はこのバイアスが、言語の存在（実在）喚起力として作用している、とも言えるのである。ソシユールもフーコーも、共にそうしたバイアスの作用を前提として立論している<sup>5)</sup>。ただし、ソシユールは、総じて文（センテンス）を想定しながらラングとしての言語の意義を探究した。他方、フーコーは主に言説（一連の文＝センテンス）を想定しながらパロールとしての言語の意義を探究した<sup>6)</sup>。

ソシユールはラングとしての言語を分析の基本的な対象とした。そして、主として構文論を展開した。フーコーはむしろ、パロールとしての言語を分析の基本的な対象とした。そして、主として語用論を展開した。フーコーは、記号とその使用者（権力者）との間の、関係的意味の解明に注力したのであった。

フーコーの著作においては、「言説」（discourse）というコトバが多用されている。それは、

3) 定延利之、『よくわかる言語学』、アルク、1999年、76頁。

宗宮喜代子、『ルイス・キャロルの意味論』、大修館、2001年、142頁

4) 全在紋、『国際会計基準への言語論的接近』、『環太平洋圏経営研究』、第14号、桃山学院大学総合研究所、2013年3月、11頁。

5) 難波江和英・内田樹、『現代思想のパフォーマンス』、松柏社、2000年、109頁、115頁。

6) ラングとパロールの違いについては、次の箇所を参照されたい。

全在紋、『会計言語論の基礎』、中央経済社、2004年、8頁。

歴史的にそれぞれの社会で形成された、言明のスタイルや様式の秩序のことを指す<sup>7)</sup>。その際、語られているものばかりでなく、タブーや慣習上語れない(語られていない)もの、および「言外の意味」(conversational implicature)や「不作為の作為」<sup>8)</sup>についての吟味も、重要な課題とされた<sup>9)</sup>。フーコーにより論じられている言説の好例として、しばしば取り上げられているのは、サイードの「オリエンタリズム」(Orientalism)である<sup>10)</sup>。

サイードの主張を要約すると、「オリエンタリズム」とは、西欧を中心とした世界がオリエントすなわち中東地域をどのように見てきたかを意味するコトバ(言説)である。それは「言外の意味」として、中東に対する偏見や誤解を植え付ける働きをしてきた。その偏見こそ、西欧がオリエントを植民地的な隷属状態においておくため、オリエントの現実とは関係なく、それにかぶせたイメージ、言説である。オリエンタリズムは、現在の米国によるアラブ政策にも現れている。イスラム教に対し、原理主義とかテロリズムとか、そうした否定的な捉え方をすることにより、西欧社会に対する敵としての位置付けを誘導している<sup>11)</sup>。

もちろん、言説の例はオリエンタリズムに限らない。言説は言明のスタイルや様式の秩序であるところから、その例は枚挙にいとまがないことであろう。「男ことば」や「女ことば」、「業界用語」や「専門用語」、「大阪弁」や「東京方言」、「マルクス経済理論」や「新古典派理論」などなど、である。すべて、語られているものと同時に、語れない(語られていない)ものも包蔵されている。

ここで、次の点は十分に注意しておきたい。すなわち、言説における「言外の意味」や「語れない(語られていない)ものの意味」は、通常〈意識されていない〉ことである。「語れない(語られていない)もの」とは、「意識して語ろうとしないもの」ばかりではなく、「無意識のうちに語っていないもの」も含むという趣旨である。「オリエンタリズム」という言説は、意識されていない言外の意味が、西欧社会(の権力者)に能動的に追従する結果をもたらしている、という文脈になる。

フーコーの言説論では、「語るもの」は、常に「語らないもの」を伴う、ということになる。換言すれば、「語らないもの」なしに「語るもの」もない、ということになる。そうした言

---

7) 児玉徳美、『ことばと論理』、開拓社、2008年、19頁。

8) 児玉、前掲『ことばと意味』、288頁。

9) 児玉徳美、『いまあえてことば・言語分析・言語理論のあり方を問う』、開拓社、2010年、vii, ix頁、62頁、153頁。

田中春美・田中幸子編著、『社会言語学への招待—社会・文化・コミュニケーション—』、ミネルヴァ書房、1996年、176頁、180~1頁。

10) エドワード・W. サイード(今沢紀子訳)、『オリエンタリズム』、平凡社、1986年、4頁。

11) 青木保、『異文化理解』、岩波書店、2001年、91~93頁、106頁。

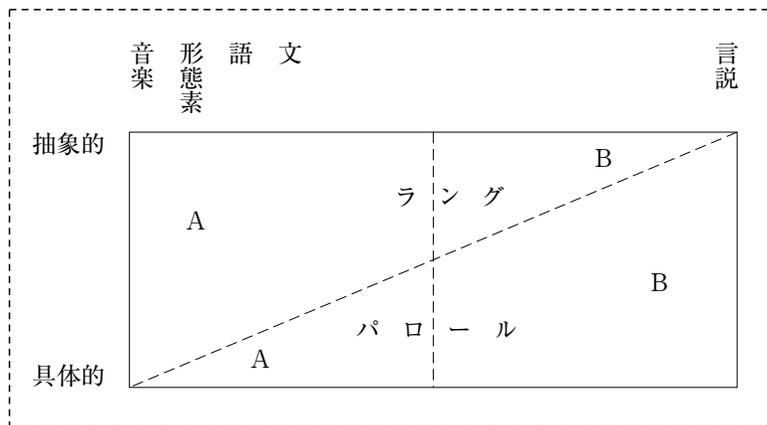
説の例は、会計（企業の言語）においても事欠くまい。数多く存在すると思われるが、それらは後述される。

ちなみに、会計学や経営学に関する論考においても、最近しばしば「言説」(discourse) というタームへの言及が見られる。しかし、その場合の言及は、哲学や言語学において現れた「言説」というタームを、そのまま複写的ないし総論的に引用・紹介するだけのケースが多い。とりわけ、言説において「語られる」ものの解説はあっても、「語られていない」ものへの言及はほとんど見られない。これでは、フーコー言説論の本意を損なっている。

要するに、専門的ないし各論的領域への展開（応用）が少ない。すなわち、哲学や言語学で言われる「言説」というタームを、会計学や経営学における個別各論的な言説例にまで敷衍して言及されていることは少ない。会計学者や経営学者たちの「言説」論の多くは、術学的なだけのターミノロジーに見えて、我われには〈飽き足らない〉ところである。

それはともかく、ソシュールのラングと、フーコーの言説との違いについて、児玉は図表7-1（ラングと言説の相関）のように解説している<sup>12)</sup>。

図表7-1 ラングと言説の相関



図表7-1に見られる用語を会計言語に置き換えれば、「語（記号）」は「勘定」に、「文」は「仕訳」に、「言説」はいわゆる「テキスト」として「財務諸表」に相当する、ということになる<sup>13)</sup>。

ソシュールは、最初に語（ラングの構成要素）がなければ存在もない、と断じた<sup>14)</sup>。フーコー

12) 児玉徳美、『ことばと認識』、開拓社、2013年、37頁。

13) 青柳文司、『会計学の基礎』、中央経済社、1991年、81頁、117頁。

14) フェルディナン・ド・ソシュール（小林英夫訳）、『一般言語学講義』、岩波書店、1972年、157頁。

また、言説に先んじての存在はない、と断じた<sup>15)</sup>。両者ともに、コトバ（語ないし言説）の意味は、他のコトバ（語ないし言説）の意味との関係の「網目」により決定されるとした<sup>16)</sup>。広い意味で、両者は我われが言うところの「意味関係論」で共通している。

ソシュールやフーコーの主張に従えば、人間の認識や知識は、現実の言語外存在をそのまま反映（写像）するものではない。現実の言語外存在に先んじて、まずコトバに埋め込まれている思想・行動・感情・価値観の様式、すなわち世界観や文化認識によって規定されている。すなわち、我われの認識や知識は、コトバ（言説）によって事前に規定されている<sup>17)</sup>。それゆえ、フーコーは、コトバ（言説）とは人間が事物（世界＝言語外存在）に加えた一つの侵犯（実践[パロール]）であるという<sup>18)</sup>。

上述のとおり、言説には、不可避的に包蔵された一定の「秩序」が存在している。我われは「無自覚」のうちに、その秩序に沿って、バイアスに満ちた存在認識を真つ当な知識と信じ込んでいる。ただ、そうした「秩序」は、時代の〈権力者〉によって造形されている。フーコーが力説するのは、この点である。古今東西、人間は時代や社会のバイアス（偏見）からは逃れられず、一体をなす「知と権力」の支配下にある<sup>19)</sup>。それゆえ、コトバ（言説）は、その時代・その社会における権力者の「番人」になりさがっているとされている<sup>20)</sup>。

### 3 エピステーメの変遷

フーコーは、言語を言表 (énoncé)、言説 (discourse)、エピステーメ (épistèmè) の3種に識別している。「言表」とは「言語表現」の約言である<sup>21)</sup>。言語のもっとも小さな単位で、ひとかたまりの発話や書字、行為（の記録）などをいう<sup>22)</sup>。サール (John Searle) のいう「発話行為」に該当する<sup>23)</sup>。「言説」とは、数ある諸言表のうちで、相互に何らかの秩序が形成さ

---

15) ミシェル・フーコー（渡辺和民・佐々木明共訳）、『言葉と物』、新潮社、1974年、91頁。

16) 丸山圭三郎、『文化記号学の可能性』（増補完全版）、夏目書房、1993年、236頁。

ミシェル・フーコー（中村雄二郎訳）、『知の考古学』〔改訳版新装〕、河出書房新社、1995年、74～75頁。

17) 児玉徳美、『言語理論と言語論』、くろしお出版、1998年、256～257頁。

18) ミシェル・フーコー（中村雄二郎訳）、『言語表現の秩序』、河出書房新社、1981年、55頁。

19) 浅見昇吾、『訳者あとがき』、ポール・ストラザン（浅見昇吾）、『90分でわかるフーコー』所収、青山出版社、2002年、123～124頁。

20) 児玉徳美、『ヒト・ことば・社会』、開拓社、2006年、98頁。

21) 中村秀吉、『パラドックス——論理分析への招待』、中央公論社、1972年、59頁。

22) 橋爪大三郎、『知識社会学と言説分析』、佐藤俊樹ほか編、『言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』所収、東信堂、2006年、183頁。

23) 田中智志、『教育思想のフーコー』、勁草書房、2009年、127頁。

れている言表の集合である。

田中の解説によれば、「エピステーメー」とは、同じ領域ないし近い領域のなかの言説が寄り集まって生み出す、言説より一ランク上のレベルにある規則の総体・編成である<sup>24)</sup>。フーコーの「エピステーメー」は、クーン (Thomas Kuhn) の「パラダイム」と通底している<sup>25)</sup>。フーコーによれば、「エピステーメー」とは、時代や社会 (文化圏) に相対的な〈知の枠組み〉である。

会計学には、「会計公準」という概念が存在する。「企業実体」、「継続企業」、「貨幣的評価」などがよく例示される<sup>26)</sup>。それら会計公準は、会計処理の「条件」ないし「前提」をいう。たしかに、会計公準は会計理論における一定の〈知の枠組み〉をなしている。ただし、会計公準は知の枠組みをなすものではあっても、「有自覚的」である。

たとえば、「継続企業」の公準について考えてみよう。当該公準は、企業が継続しないという反証のない限り、会計上の評価や処理はすべて、継続企業の立場から行われねばならないという前提である。企業が清算や解散に際した場合には、「継続企業」の前提に基づいた評価(会計処理)などありえない。「継続企業」よりも「清算公準」の前提に立って、資産評価の原則はとうぜん売却時価によることとなる。「継続企業」を前提とした時のような取得原価によらないことは、言うまでもない。

資産に対して取得原価を基準にした評価論、あるいは売却時価を基準にした評価論、それらはそれぞれフーコーのいう「言説」を構成する。会計理論におけるエピステーメーとは、それら会計公準のさらなる背後に潜む「無自覚的」な条件ないし前提を指している。そうした条件ないし前提における〈知の枠組み〉ということになるであろう。

フーコーは、その著『言葉と物』(*Les Mots et les Choses*)の中で、知(真理)の歴史について、3つの断層(4つの時代)における独自のエピステーメー観を提示した。20世紀最後の年(1999年)において、今村・栗原が整理したところによれば、次のとおりである<sup>27)</sup>。

- (1) 16世紀ルネッサンス(中世)的エピステーメー
- (2) 17世紀・18世紀古典主義的エピステーメー

24) 上掲書, 129~130頁。

25) ヒューバード・L・ドレイファス&ポール・ラビノウ(山形頼洋ほか共訳), 『ミシェル・フーコー 構造主義と解釈学を超えて』, 筑摩書房, 1996年, 98~99頁。

26) 飯野利夫, 『財務会計論』〔三訂版〕, 同文館, 1993年, 1-14頁。

27) 今村仁司・栗原仁, 『フーコー』, 清水書院, 1999年, 81頁。

(1) から (3) までは前掲拙稿(「国際会計基準への言語論的接近」, 14頁)でも紹介した。(4) が現代のエピステーメーである。

- (3) 19世紀近代的・人間主義的エピステーメー
- (4) 今後に到来が予感される新エピステーメー

時代の変遷について言えば、「歴史学」ではふつう、史実は時間的に連続的かつ昇順的に記述される。これに対し、フーコーは如上(1)から(3)までにおけるエピステーメーの変遷を、むしろ不連続的(断続的)かつ遡及的に論述している。すなわち、エピステーメーの変遷を歴史学的にではなく、考古学的(ないし系譜学的)に議論している。

竹内によると、考古学ないし「系譜学」というのは、今、絶対の真理や道徳として存在するものを、そのようには存在しなかったかもしれない何ものかとして歴史的に再構成する学である。系譜学という名称には、過去を現在に平坦につなげるきらいのある歴史学との、違いが込められている。<sup>28)</sup>

フーコーが従事した「考古学」とは、実際の経験に先立つア・プリオリ(先天的)なものの見方を発掘する学問、の意である。彼の議論の中核は、(3)の19世紀近代的・人間主義的エピステーメーにあったが、当該エピステーメーに関連している限りでの、知の枠組みにおける変遷について論じている。当該エピステーメーに関連しない中世に先立つ、いわゆる古代ギリシアやローマの権力体制などについては、議論の対象から外されている。

歴史学は一般に、進歩史観に立って叙述される。しかし、フーコーの系譜学はアンチ・ダーウィニズム(反進化論)に立っている<sup>29)</sup>。たとえば、チョムスキーやサイドは「人権」や「正義」などに普遍的価値(時代や社会を超越した価値)を認めるが、フーコーは普遍的価値の存在を否定する<sup>30)</sup>。

フーコーによれば、エピステーメーという知の枠組みは、ア・プリオリなものである。経験や実証によるものではない。彼によると、すべての「存在」は「言説」(ディスクール)の網の目を通してのみとらえられ、「存在」として現れる<sup>31)</sup>。ソシュールは、語や文のラング次元において、構文論的な意味関係論を提起した。それに対し、フーコーは言説(一連の文)のパロール次元において、語用論的な意味関係論を展開した。

ソシュールとフーコーは、「意味関係論」という点では共通していた。しかし、両者の相違を約言すれば、ソシュールの言語観は「意味文章<sup>32)</sup>論」(the theory of meaning as

---

28) 竹内洋、『社会学の名著30』、筑摩書房、2008年、78頁。

29) ミシェル・フーコー(中村雄二郎)、『知の考古学』(改訳版新装)、河出書房新社、1995年、231~234頁、285頁。

30) 児玉徳美、『ヒト・ことば・社会』、開拓社、2006年、117頁。

31) フーコー(中村訳)、前掲『知の考古学』[改訳版新装]、74~75頁。

32) 「文」や「文章」という日本語の意味は多義的であるが、ここでいう「文章」は、英語でいうセンテンス(sentence)の意味である。日本語においては、「。」(句点)で終わるものの意である。

sentence), フーコーのそれは「意味言説論」(the theory of meaning as discourse) と評しえよう。

「権力」と一体をなす「知(真理)」は、言語により表現されなければならない。表現されない知(真理)は、その存否を確認しえない。問題は、その際の〈言語観〉である。言語観が違えば、知(真理)の内容も異なって規定される。言語観の違いについての認識が、知(真理)と一体をなす権力の実相をあぶりだす。

フーコーによれば、中世・ルネッサンス期においては、すべての物に「類似関係」の有無が読み込まれていたとされる。地上の草は天空の星に類似し、それを反映するものと考えられた。「頭部の病気を予防するためにクルミがしばしば用いられたのは、クルミの堅い殻が頭蓋骨に似ているからであり、さらにはクルミの実が脳を連想させたからであった。」<sup>33)</sup>

この場合、類似関係はたんに人間の想像力によって作り出されたものではなく、「神の署名」であるとされた。たとえば、「世界の生物を調査することは、神が人間に示した秘密の〈記号〉を解読することだと考えられていた」<sup>34)</sup>。

神崎の解説によれば、「ルネッサンス期における類似性の重視は、『人々の習慣として、二つのもののあいだに何らかの類似を認めるたびに、両者の事実上の相違に関してさえ、一方において真と確かめた事柄を、両者についても言い立てる』と、デカルトが『精神指導の規則』の冒頭で述べているような事態にまで到達する。たとえば、双子はよく似ているが、仮に違った側面があったとしても、それは隠れていて、いつかはその双方に発現すると考えるのである。」<sup>35)</sup>

中世では、「言葉はすなわち物であった。物の間の秩序とラングの秩序は、まったく同じものとして認識されていた。」<sup>36)</sup> この時代の言語は、自然に存在している事物と同等なものであった。言語が持つ意味も、類似を想起させるものでしかなかった。ルネッサンス期における事物と言語は、まったく同一の表面上で相互に結び付けられ、相互に連想でつながっていた<sup>37)</sup>。話し(言語)と事物(現実)とが、類似し(混同され)ていた、フーコーは、そういうのである。

ルネッサンス(中世)のエピステーメーは、「言語」と「物」(言語外実在)とは、同一のレベルすなわち同じ地層で、交錯していると見られた。これに対して、古典主義時代のエピステーメーでは、「言語」と「物」(言語外実在)とは裁断された。言語は表象として、物(言語外存在)の世界からは自律していると見られた。「名は物の一部ではなく、物をさし示す記号なのである。物には固有の秩序はなく、ラングと同じ(狭義の同型的な)秩序が支配していると考

33) 今村・栗原、前掲『フーコー』、清水書院、1999年、82頁。

34) 中山元、『はじめて読むフーコー』、洋泉社、2004年、95頁。

35) 神崎繁、『フーコー 他のように考え、そして生きるために』、日本放送出版協会、2006年、22頁。

36) 池田清彦、『構造主義生物学とは何か』、海鳴社、1988年、108頁。

37) 今村・栗原、前掲『フーコー』、82頁。



次いで、19世紀近代的・人間主義的エピステーメの時代における特徴は、「人間」の概念が登場したこととされる。言語は物の世界（自然の秩序）をそのまま表象（写像）するものではなく、その間に「人間」が登場して言語を支配することになったとする。物の世界（自然の秩序）と言語とは別物である。別物である両者を結び付けている張本人が「人間」である。こうして、古典主義時代において当然視されていた、物の世界に対する言語による表象（写像）の自明性は、根底的に懐疑されることとなった。物の世界と言語の関係に対する人間による根拠づけ、その成否が絶えず問われることとなった<sup>42)</sup>。

じっさい、古典主義時代においては、認識の客体としての「人間」は、くだんの表(タブロー)の中にも存在していなかった<sup>43)</sup>。古典主義時代の知は、「博物学」、「一般文法」、「富の学問」、などと呼ばれていた。エピステーメの転換により、それら学問は近代において、それぞれ「生物学」・「言語学（文献学）」、「経済学」、と呼ばれるようになった。それら近代の学問に共通しているのは、人間が学問の客体として登場したことである<sup>44)</sup>。それら学問は、ともに『人間についての科学』という性格を担った<sup>45)</sup>。

古典主義時代においては、認識の客体であると同時に主体でもある『人間』は、存在しなかった。フーコーはそう言うのである<sup>46)</sup>。とりわけ、認識の客体としての「人間」は、近代に特有の現象にすぎない。フーコーの権力観において、「人間」という概念は、せいぜい規律権力実現の道具とされた「錯覚」にすぎない<sup>47)</sup>。

近代のエピステーメにおいて、「人間」は過度に強調されている<sup>48)</sup>。フーコーによれば、認識の客体かつ主体としての「人間」概念は、たかだかこの150年らしい話題でしかない<sup>49)</sup>。フーコーは『言葉と物』の最後のパラグラフにおいて、「人間」概念は間もなく終焉を迎えると予告した<sup>50)</sup>。「人間」という概念は、過去の中世・古典主義時代にも未来のポスト近代（現代）

42) 今村・栗原、前掲『フーコー』、86～87頁。

43) 中山元、『フーコー入門』、筑摩書房、1996年、106頁。

44) 上掲書、84頁、86頁。

池田、前掲『構造生物学とは何か』、114～115頁。

45) 今村・栗原、前掲『フーコー』、86～87頁。

46) フーコー（渡辺・佐々木共訳）、前掲『言葉と物』、330頁。

47) ミシェル・フーコー（慎改康之訳）、『精神医学の権力』、筑摩書房、2006年、74頁。

48) クリス・ホロックス（文）；ジョラン・ジェヴティック（イラスト）（白仁高志訳）、『フーコー』、現代書館、1998年、74頁。

49) 中村雄二郎、『知の変貌—構造的知性のために—』、弘文堂、1978年、24頁。

50) フーコー（渡辺・佐々木共訳）、前掲『言葉と物』、409頁。

にも存在しない、というのであった<sup>51)</sup>。フーコーの構造主義的言語観は、それをソシユール言語学などから学んだという<sup>52)</sup>。

フーコーの認識では、近代の権力は、専制君主といった特定の人間にはない。むしろ社会の仕組み（ハノプティコン＝一望監視施設）の方にあるとされた<sup>53)</sup>。

規律権力下における「知と権力の一体性」は、とりわけ学校教育における「教師への道」などに明白であろう<sup>54)</sup>。近代において、学校の教師になるためには、教員資格を得なければならない。教員資格を付与する者（仕組み＝装置＝制度）こそが、近代の権力者である。すると、教師とは「権力の番犬」ということになろう。

それにしても、脱獄者の出現にあるとおり、監獄という近代の権力装置にもたまたま「失敗」がある。これについては、「体制が非行を必要としているから」というフーコーディアンもいる<sup>55)</sup>。その通りとすれば、近代の権力は懐が深い、ということになろう。

ドゥルーズのフーコー理解によれば、我われは今や近代の規律権力社会から脱却しつつある。そして、現代では、管理権力社会に足を踏み入れつつあるとする<sup>56)</sup>。ただ、エピステーメー（知の枠組み）と一体をなす権力の変化は、いつの時代でも複合的である。分離的ではない。法メカニズム（君主権力）・規律メカニズム（規律権力）・安全メカニズム（管理権力）は、いつの時代でも相互に競合しながら併存している。

「つまり、ある要素があって次に別の要素が来るとか、ある要素が登場してそれ以前の要素を消滅させる、というような一連の流れがあるわけではありません。規律メカニズムが法メカニズムに取って代わり、安全メカニズムが規律メカニズムに取って代わったというのではな

---

51) 神崎の評言では、近代における「人間中心主義」は思い上がりにすぎない。その訳は、人間をして役者と演出家を兼ね備えさせようとするような振る舞いだからという。

神崎、前掲『フーコー 他のように考え、そして生きるために』、40頁。

52) 柄谷行人談、中村雄二郎、『知の変貌・知の現在』所収、青土社、2001年、14頁。

中山、前掲『フーコー入門』、109頁。

フーコーは、当初は構造主義に同調する様子であった。しかし、1972年以来、自身は構造主義者ではないと宣言するようになった。にもかかわらず、フーコーは無意識的な構造を問題にしている点で、構造主義と明らかな類似点をもっている。ガッティングのような研究者たちはそう見ている。以下の2篇を参照せよ。

中山元、『はじめて読むフーコー』、洋泉社、2004年、24頁、35頁、201頁。

ガリー・ガッティング（井原健一郎訳）、『フーコー』、岩波書店、2007年、87頁。

53) 小野功生・大城信哉、『構造主義』、ナツメ出版企画、2004年、108頁。

54) 中山元、『フーコー 生権力と統治性』、河出書房新社、2010年、59頁。

55) クリス・ホロックス、『フーコー』、現代書館、1998年、119頁。

56) ジル・ドゥルーズ（宮林寛訳）、『記号と事件 1972-1990年の対話』（改訂版新装）、河出書房新社、1996年、288～289頁。

い。]<sup>57)</sup> 3種メカニズムはいつの時代でも複合的（相関的）に併存している。併存しながらも、主調（中心的なメカニズム）が代わっていく。これがフーコーの見方である。現代は、規律権力主調から管理権力（環境介入権力）主調への過渡期である。これが、ドゥルーズのフーコー解釈である。

現代の管理権力主調の時代にあつては、「安全メカニズム」の発動が特徴をなしている。ちなみに、この場合の「安全」は、普通われわれにイメージされるような、『危なくないこと』といった、そうした意味に理解すべきではない。そのような理解では、ここでいう「安全システム」の語意を誤解してしまいかねない。

「安全」(security)とは、語源的には、「気遣い(クーラ cura)の『ない(se)』こと」という意味とされる。君主権力や規律権力の場合のような、強権的な統治ではなく、不安や心配・懸念といった、ある種き遣いの少ない統治、それを目標とする「安全」である<sup>58)</sup>。ここで言う「安全」とは、権力者にとっての「安全」の意であり、被支配者たちにとっての「安全」の意ではない。

現代の管理権力は、環境への介入を通じて、安全メカニズムを人口全体において機能させようとしている。規律権力は、個々人を可視化して監視しようとするものであった。しかし、管理権力は環境に介入して、諸個人よりも人口全体を保険統計的に統治しようとする。規律権力は、犯罪後における刑罰を通じて犯罪ゼロを目指す。しかし、管理権力は、犯罪前における環境介入（たとえばガードマンやカメラによる監視）を通じて、統治に対する全体的なコスト・パフォーマンスを上げようとする<sup>59)</sup>。

佐藤の講説では、現代の管理権力すなわち「新自由主義権力とは、環境に介入し、環境を設計することで、統治不可能な偶然的要素を統治可能なものへと変換する権力なのである。私たちは例えば、そうした偶然的要素を『人口』と名づけてもよい。環境介入権力は、多様で偶然的要素を孕んだ人間の群れを、『人口』という統計の対象へと変換し、出生率、罹患率、死亡率といった統計的データとして捉えることで、統治可能なものに変えようとする。その意味において環境介入権力とは、人間の生をまるごと統治の対象とするような、生政治の一つのヴァリエーションなのである。』<sup>60)</sup>

古典主義時代（君主権による法メカニズム）、近代（規律メカニズム）、現代（安全メカニズム）については、権力の行使空間が異なる。フーコーはそれを次のように整理している。被支

57) ミシェル・フーコー（高桑和巳訳）、『安全・領土・人口』、筑摩書房、2007年、11頁。

58) 高岡佑介、「群生の場としての『人口』—生政治学における『生』の概念について」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第2分冊』、第55輯、2010年2月、134頁。

59) 佐藤嘉幸、『新自由主義と権力』、人文書院、2009年、68～71頁。

60) 上掲書、70頁。

配の対象となる「人の群れ」は、法メカニズムのもとでは君主権の及ぶ領土内の臣民である。規律メカニズムのもとでは諸個人の身体である。そして、安全メカニズムのもとでは人口全体である、としている<sup>61)</sup>。

「社会の代表的な病は、その社会のもっとも弱いところを、そのもっとも強いところを裏返して示す」<sup>62)</sup>。「もっとも弱いところ」とは被支配者たちを意味し、「もっとも強いところ」とは権力者と意味する。

フーコーが取り上げた疾病モデル（代表的な病）によれば、法メカニズム時代では「癩病」であった。罹病者は『排除』された。規律メカニズム時代では「ペスト」であった。町を単位として、罹病者たちは『隔離』された。隔離にはエクリチュール（文書）化が須要とされ、しかも健康な者たちまでもが検査の対象となった。安全メカニズム時代では『天然痘』であった。環境に介入し、人口全体が罹病監視の対象となっている。

フーコーはソシュールの最も正統的な後継者である、という評がある<sup>63)</sup>。にもかかわらず、言語観の点で、フーコーとソシュールとで大きく異なるところもある。ソシュールは文内の言語構造を中心に分析しており、文と文のつながりや言説についてはほとんど論じていない<sup>64)</sup>からである。

たしかに、コトバ（言語）の意味は、語句や一文を単位としてのみ決まるというものでもなかろう。言説（文連鎖）の単位ではじめて明らかとなる意味もある。言説の点で、じっさい日本語と英語とでは、語句や一文の単位だけでは判明しない意味の違いが見られる。

一例をあげれば、日本語の「『善処します』がしばしば空手形のあいさつ表現になっているのも、『善処』の素振りを見せるだけで十分であり、『善処』の結果を達成しなくても許されるためである。しかし『善処します』に対応する英語で例えば I'll do my best to realize it. は『善処』の成果が期待され、その成果が達成されない場合、約束違反の『うそつき』と非難されることもある。」<sup>65)</sup>これなど、日本語や英語における言説レベル（「文化の違い」や「言外の意味」）にまで立ち入らなければ、明らかとならない含意の差である。

権力変遷にともなう西洋社会言語観の推移が、企業の言語としての会計に対する認識の変転とどのように重なるのか。以下、本稿の主題に入っていく<sup>66)</sup>。

---

61) フーコー（高桑訳）、前掲『安全・領土・人口』、15～16頁、29頁。

62) 中山元、『フーコー 生権力と統治性』、河出書房新社、2010年、51～52頁。

63) 池田、前掲『構造生物学とは何か』、116頁。

64) 児玉、前掲『ことばと意味』、18頁。

65) 上掲書、23頁。

66) デイビス（Stanley Ward Davis）も、J. ハーバーマスの言語論を援用して、権力と会計との関係について論じている。言語としての会計は、権力支配の用具である。それは、パワー・エリートのための、現実を歪めるコミュニケーション装置でしかない。そう裁定している。次を参照せよ。 ↗

#### 4 中世の会計理論と権力

ルネッサンス期（中世）は、封建制と荘園制からなる社会であった。一般的な人民統治形態としては、当時は地方権力の時代であった。この場合、地方権力者とは、貴族やキリスト教会などを指す。それら権力界層は、いずれもある一定領域内の人びとだけを統治していた<sup>67)</sup>。経済的には、自給自足で農業を中心とする時代であった。また、中世後期になってからは、イタリアのベネチア等で、新しい界層としての自治都市が興った。会計的には、この時期に複式簿記が、パチョーリの『スムマ』により1494年に完成を見た。

既述のように、この時期の言語観は「類似」であった。私見によれば、会計学説史的には、いわゆる「人的勘定学説」(personalistische Kontentheorie)が、この言語観に重なりと見られる。この学説は、勘定を「擬人化」して説明する会計言語観をとった<sup>68)</sup>。擬人化とは、人間以外のものを人間に見立てて表現する修辞（レトリック）である。したがって、人間以外の勘定を人間に「類似」したものとして説明しようとした学説だった<sup>69)</sup>。パチョーリによる貸借関係の解説は、初期の人的勘定学説であったとする指摘がある<sup>70)</sup>。もし、この指摘のとおりとすれば、会計学説史においても、フーコーの時代区分が裏付けられることとなる。

ただ、ケーファーによれば、斯学においては人的勘定学説が長らく支配的であった。19世紀終わりまでは、イタリアやドイツにおいても人的勘定学説が支配的であった。この学説は、19世紀末葉に至ってから、物的勘定学説(materialistische Kontentheorie)にとってかわられたとされている<sup>71)</sup>。19世紀末葉と言えば、フーコーの時代区分では、古典主義時代ばかりか、近代にもかなり食い込んでいる。会計理論において人的勘定学説は、複式簿記生成以来400年ほども続いたことになる。

人的勘定学説は、後世になって「擬人説」(personification theory)<sup>72)</sup>とも呼ばれた古い会計

↘ 全在紋・永野則雄編著、『現代会計の視界』、中央経済社、1992年、34頁以下。

67) 箱田徹、『フーコーの闘争—〈統治する主体〉の誕生』、慶応義塾大学出版会、2013年、99頁。

68) 「人的勘定学説」、『月刊簿記』、第6巻第11号、中央経済社、1955年11月、100頁。

69) 擬人化（擬人法）とは、人間以外のものと人間との間に「類似点」を見つけて、それを表現する隠喩（メタファー）の一種である。

瀬戸賢一、『日本語のレトリック』、岩波書店、2002年、20頁、35頁。

70) 黒澤清、『簿記原理』、東洋出版、1934年、49頁。

片岡康彦、「複式簿記の誕生とパチョーリの簿記論」、平林喜博編著、『近代会計成立史』、同文館、2005年、32頁。

71) 安平昭二、『簿記理論研究序説』、千倉書房、1979年、135頁。

72) 横浜市立大学商学部会計学研究室編、『簿記事典』、同文館、1955年、395頁。

理論である。吉田・田島の解説によると、人的勘定学説は「複式記帳を、受取つた者は後日支払の義務を生ずるから借方に記入し、渡した者は後日受取る権利を生ずるから貸方に記入すると説く。それ故この説では受渡及び貸借なる語が、辞本来の意味に用いられている。この説は信用取引の記帳から出発したもので、それを他の財産部分にまで拡張し、各勘定を人格化して、その背後に管理者を想定することによって、全取引を同一記帳法則の下に説明する。例えば……商品を現金で買入れた取引は、商品を受け入れた庫番は受方としての彼の勘定の借方に、代金を支払つた出納掛は、渡方として彼の勘定の貸方にそれぞれ記入されるのである。……この説は……例えば減価償却や火災損失の如きは、擬人的に説明することが困難である。」<sup>73)</sup> 熊本は別に、人的勘定学説では、損益勘定や統制勘定等に対する説明も難しいと指摘している<sup>74)</sup>。

人的勘定学説がもつ上のような擬制的構成を排除し、「経済的事実」に即して「貨幣・材料・機械などを実物そのものとしてとらえる」<sup>75)</sup> 理論が物的勘定学説であるとされる。人的勘定学説は勘定を人と人との関係として見る。物的勘定学説は勘定を物と物との関係として把握する。物的勘定学説においては、物と物との関係が、「経済的事実」と見られているのである。勘定を人と人との関係とみる人的勘定学説は、擬制的であるがゆえに「経済的事実」に即していない、と見られたのである。

言語観に関するフーコーの時代的区分と突き合せれば、会計理論の世界における人的勘定学説は、基本的にルネッサンス（中世）的言語観と重なる。物的勘定学説は、基本的に古典主義的言語観に重なる、と言えよう。ただ、会計理論の世界においては、人的勘定学説が、中世から古典主義時代をも過ぎ、近代の中ごろ（19世紀末）に至るまで、長らく引きずられたということになる。

物的勘定学説の時代になっても、会計実務の世界における「借方」(debtor)・「貸方」(creditor)の呼称は、人的勘定学説時代の呼び名がそのまま踏襲された。人と人との関係と見られた時代の呼び名が、物と物との関係と見られる時代における呼称として、今に至るまでそのまま引き継がれている。そのため、複式簿記初学者たちの多くは、「『借方』と『貸方』って逆ではないか」といまだに戸惑いがちである<sup>76)</sup>。貸借が逆に見えるのは、無自覚のうちに近時の言説（物的勘定学説）に引き寄せられ、往時においてはむしろ真つ当であった言説（人的勘定学説）を、

73) 吉田良三・田島四郎、『簿記概論』（改訂版）、同文館、1947年、253～254頁。

74) 熊本吉郎、「勘定学説の分類に関する一考察」、『立命館三十五周年記念論文集法経篇』所収、立命館出版部、1935年、501頁。

75) 安平昭二、『簿記理論研究序説』、千倉書房、1979年、135頁。

76) 坂手恭介、「複式簿記の仕組み」、全在紋・朴大栄・谷武幸編著、『新版まなびの入門会計学』、中央経済社、2010年、42～43頁。

一方的に見下しているためであろう。

19世紀末葉になって、ほとんどの会計学者は人的勘定学説に替えて物的勘定学説を受け入れた<sup>77)</sup>と言われている。以来、物的勘定学説こそが「本来の勘定理論」であるとされている<sup>78)</sup>。それは、企業会計において、今日も基本的に依拠されている考え方と見られる。物的勘定学説に与する多くの会計人によれば、人的勘定学説は勘定を「擬人化」した考えにすぎない。思想の整理が不十分で、科学上の学説たる要件が備わっていないとまで、批判する<sup>79)</sup>。

ちなみに、そこで言われる「科学」とはいったい何であろうか？ 物的勘定学説からする人的勘定学説批判は、フーコー的には、後世の科学観（近代のエピステーメー）からする前世の科学観（ルネッサンス期および古典主義時代のエピステーメー）批判にすぎないと見られる。私見によれば、両学説とも大差はない。言わば、「五十歩百歩」の類の議論と見られる。

物的勘定とは別に、債権・債務勘定に限定しても、人名勘定の時代は長らく続いた。売掛金・買掛金など、統括勘定（統制勘定）が一般化したのは、近代も20世紀に入って以降であった<sup>80)</sup>。ただ、物的勘定学説は貨幣・材料・機械などを実物そのものとしてとらえ、それら実物に与えられた勘定名称が「経済的事実」を正当に写像していると想定する。その言語観は、我われがいうところの「意味実体論」である。ソシュールの意味関係論からすれば、とうてい容認されるところではない。物的勘定学説は人的勘定学説を「擬制」でしかないと非を鳴らす、人間の言語システムそのものが、いずれも「擬制」（fiction）でしかない。物的勘定学説者たちはそのことに無明でいる<sup>81)</sup>。

先に言及したとおり、フーコーのいう「言説」とは、歴史的にそれぞれの社会で形成された、言明のスタイルや様式の秩序のことを指す。「人的勘定学説」も「物的勘定学説」も、ともに会計理論においてそれぞれ異なる「言説」をなす例である。そう言ってよい。前節において紹介したとおり、田中智志の布置によれば、「エピステーメー」は「言説」の上位クラスであり、「言表」は「言説」の下位クラスであった。ただ「言説」には、その内部において、更に上位クラスと下位クラスとに分類（区別）されることがある。

ある『簿記事典』によれば、勘定学説は図表7-3のとおり分類されうるとしている<sup>82)</sup>。

77) カール・ケーファー（安平昭二訳）、『複式簿記の原理』、千倉書房、1972年、24頁。

78) 安平昭二、「人的勘定学説」、神戸大学会計学研究室編、『第六版 会計学辞典』、同文館、2007年、700頁。

79) たとえば、次の文献を参照せよ。

レオン・ゴムベルグ（岡田誠一訳）、『批判的勘定学説史』、東洋出版、1935年、27頁。

熊本吉郎、前掲「勘定学説の分類に関する一考察」、505頁。

片岡義雄、「人的勘定学説（擬人法）の展望」、『駒大経営研究』、第3巻第3号、1971年12月、11頁。

80) 久野秀男、「英米古典簿記研究拾遺（承前）」、『学習院大学経済論集』、第16巻第3号、1980年3月、46頁。

81) 全在紋、前掲『会計言語論の基礎』、12～13頁を参照のこと。

82) 横浜市立大学商学部会計学研究室編、前掲『簿記事典』、394頁。

図表7-3 勘定学説の分類

- 1) 人的勘定学説
  - (a) 人的一勘定系統説
  - (b) 人的二勘定系統説
- 2) 物的勘定学説
  - (A) 静的勘定学説
    - (a) 物的一勘定系統説
    - (b) 物的二勘定系統説
    - (c) 物的三勘定系統説
    - (d) 貸借対照表学説
  - (B) 動的勘定学説
    - (a) 循環学説
    - (b) 成果学説

人的勘定学説内部の下位クラス勘定学説には、「人的一勘定系統説」と「人的二勘定系統説」との区別がある。また、物的勘定学説内部の下位クラス勘定学説には、「静的勘定学説」と「動的勘定学説」との区別があり、それら下位クラス言説には、さらにその下位クラスをなす勘定学説が存在する。図表7-3のとおり、静的勘定学説内部に4学説、動的勘定学説内部に2学説が存在している。各種学説間の種差（分類基準）については、本稿の関知するところではない。よって、これ以上の言及は控えたい。もし関心のある読者がおられたら、原典（上掲『簿記事典』）を参照ねがう。

茂木説によれば、ルネッサンス期（中世）における会計制度は、口別損益計算が主調であった。17世紀古典主義の時代に入って、会計制度は口別計算から期間計算に転じたとされる。期間計算はオランダで誕生したと強調されている<sup>83)</sup>。オランダ東インド会社の会計などはその画期的な例、ということになるのであろう。同社は、ルネッサンス期（中世）のイタリア企業とは異なり、永続資本（永久資本）による事業だったからである<sup>84)</sup>。

古典主義時代になって、絶対王政になる集権的国家体制がとられることとなった。君主権の時代、暴力による「死の権力」の時代となった。君主に逆らう者は殺害された。経済史的には

83) 茂木虎雄, 「会計史研究の方法について」, 『産業経理』, 第44巻第4号, 1985年1月, 1~9頁。

84) 水野和夫・川島博之, 『世界史の中の資本主義』, 東洋経済新報社, 2013年, 20~22頁。

重商主義の時代であった。重商主義とは、貿易などを通じて貴金属や貨幣を蓄積し、国富を増大させようという考え方である<sup>85)</sup>。ただし、富と貨幣、価値と価格とは混同された。企業はあったが、いまだ国営企業（武器製造などが好例）が中心であった。

## 5 近代の会計理論と権力

古典主義時代に続いて、時代は1800年（19世紀）を前後して近代に入る。主権は君主から市民階級に移った。西洋において、市民社会と資本主義が確立した。富の源泉は貨幣よりも農業にあると見られるようになり、まず重農主義（physiocracy）が強勢となった。その思想は、やがてアダム・スミス以降の古典的自由主義に影響を与えた。フーコー説によれば、時代は暴力による「死の権力」から、規律による「生の権力」の時代へと転じた。「生の権力」時代においては、被支配者たちは殺害するよりも生かしておいて、彼らからいっそう多くを収奪する。これが基本的な政策と化した。

18世紀後半、イギリスにおいて産業革命が起こる。これにより、ブルジョワ的産業資本主義が力を得た。ビジネスの形態は、国営企業中心から民間企業中心へと転化していった。周知のとおり、産業革命は、企業会計の世界にも大きな変化をもたらした。減価償却制度の誕生である。会計を企業の言語とみる観点からは、連辞関係側面では複式簿記のまま、連合関係側面では人的勘定学説から物的勘定学説へと主役が交代した。そして、今日に至っている。

フーコーによれば、近代においてはもはや、視覚的な「支配階級」など見えなくなった。規律システムを基礎とする近代的権力は、社会のいたるところで多数の微視的中心をなして分散されている。そして、それらは網目のように相互に関連し合っている。彼によると、近代的権力は局所的（非全体主義的）であるという。

マルクス主義やソビエト連邦は、近代においても全体主義的な支配を想定した。彼らが失敗したのは、そのためである。近代的権力における非全体主義性を見損なったからである<sup>86)</sup>。全体主義の時代ではないところで、全体主義の理想を追い求めようとした。それは的外れの試みだった、ということになろう。ドン・キホーテはルネッサンスのエピステーメの虜囚だったが、マルクス主義やソビエト連邦は古典主義的エピステーメの虜囚だった、ということになろう。

近代の権力は分散していて、特定の権力者（支配階級）など見出すことはできない。それゆえ、権力者は「匿名」（anonymes）である<sup>87)</sup>。「匿名の権力」とは「独裁者なき権力」という

85) 茂木誠、『経済は世界史から学べ』、ダイヤモンド社、2013年、191頁、195頁。

86) ガリー・ガッティング（井原健一郎訳）、『フーコー』、岩波書店、2007年、120～121頁。

87) ミシェル・フーコー（慎改康之訳）、『知の考古学』、河出書房新社、2012年、8頁。

Michel Foucault, *L'archéologie du savoir* (Paris : Gallimard, 1969), couverture de derrière.

意味になる。近代の規律権力は、特定の権力者による支配ではなく、制度（装置や構造）による支配を意味することとなる。例のパノプティコン（一望監視施設）は、権力を有する監視主体がいったい誰であるのか、知ることができない<sup>88)</sup>。それゆえ、まさに「匿名」である<sup>89)</sup>。

フーコーによれば、近代は「人間主義的エピステーメー」の時代である。前述のように、「認識の客体」ないし「学問の客体」としての「人間」概念は、近代に特有の発想であった。当該概念は、ルネッサンス期（中世）にも古典主義時代にもなかったとされる。エピステーメーとして、「人間」概念は近代においてたまたま過度に強調されただけである。前述したとおり、「人間」概念は間もなく終焉を迎える、とされた。

フーコーが近代において「人間の登場」があったというのは、『哲学』の中心的課題として初めて「人間」が位置付けられた、という意味である<sup>90)</sup>。ここでいう『哲学』に『会計学』を代入すると、どうなるであろうか。人間を中心的課題とする研究領域として象徴的な事例が、会計学においても存在するかに見える。「人的資源会計」(human resource accounting) 論である。

人的資源会計論における「人間」概念は、経営者や株主はじめ投資家といった人びと（近現代の権力者）に関する人的資源性の意味ではない。そうではなく、被支配者（組織）としての「従業員個々人や人的組織の重要性を正しく認識せしめ、企業組織のあり方を示唆して、人的資源の適正配置、有効利用、管理保全を行ない、……企業の経営効率の向上を期待しようとする」<sup>91)</sup> ことに発する概念である。

若杉によれば、「人的資源会計に関する研究は1960年代から70年代にかけて主にアメリカにおいて活発に展開され、数多くの研究成果が発表された。……しかしながらその後研究活動もまた企業における実践も活性を失い、その重要性に関する認識は衰えないものの、人々の関心は低下していった」と言われる。ただ、21世紀に入る頃からヨーロッパ諸国やインドにおいて人的資源会計の必要性が再認識され、その実践例も見られるようになった、とも指摘している<sup>92)</sup>。しかし、実際のところ、人的資源会計研究に、往時のような華々しさなど、今は見る影もない。

「米Google社がスキャンした書籍のうち約500万冊をもとに、5000億語からなるデータベ

---

88) 小野功生・大城信哉、『構造主義』、ナツメ出版企画、2004年、108頁。

89) 星野智、「匿名の権力—M・フーコーと権力」、『情況第二期』、第10巻第2号、1999年5月、183頁、187頁、196頁。

サラ・ミルズ（酒井隆史訳）、『ミシェル・フーコー』、青土社、2006年、44頁、49頁。

90) 神崎、前掲『フーコー 他のように考え、そして生きるために』、34頁。

91) 若杉明、『人的資源会計論』、森山書店、1973年、序2頁。

92) 若杉明、「人的資源会計」、神戸大学会計学研究室編、『第六版 会計学辞典』、同文館、2007年、701頁。

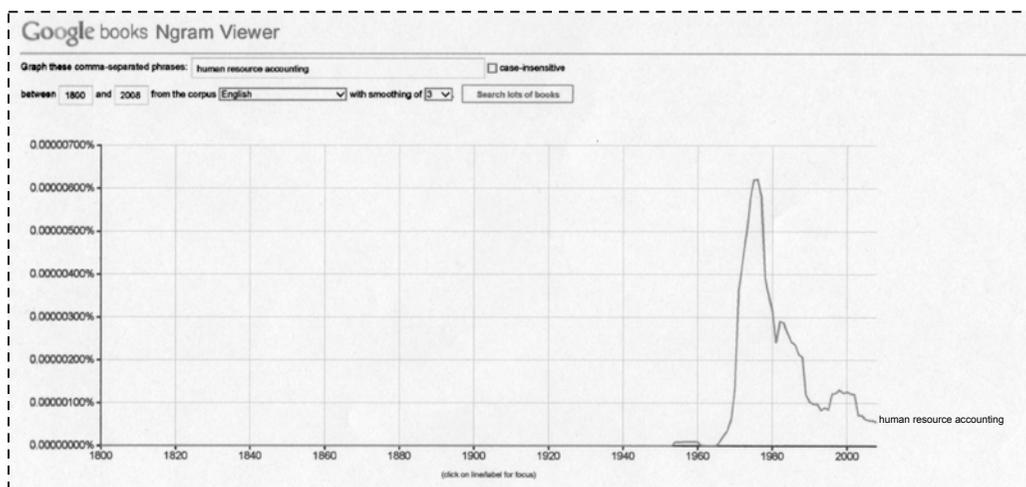
スが構築されていて、1500年代からの今までの出版された書籍に出現する語句について、その使用頻度の推移をグラフにできるGoogle Ngram Viewerというものがある。<sup>93)</sup>『Google Ngram Viewer』は、グーグルでデジタル化され読み取れるようになった膨大な出版データの集計である。「人的資源会計」(human resource accounting) という用語について、1800年から2008年(2014年6月5日時点で最新)に至るまでの変遷をたどると、図表7-4のようであった。

人的資源会計実施の先鞭は、アメリカのバリー社にあるという<sup>94)</sup>。当該会計においてもっとも困難なのは、社員という人的資産価値の評価法である。近代経済学的には、社員が会社にもたらす将来のサービスを貨幣価値で測定し、それを現在価値に割引いて測定することであろう。

しかし、そうした価値の直接的測定(direct measurement)は難しい。それゆえ、会計実践としては歴史的原価・取替原価・機会原価などによる規約的測定(measurement by fiat)で代用されようとした<sup>95)</sup>。しかし、いずれの評価法も実務的に定着することはなかった。

思うに、人的資源会計が実現できなかったのは、単に人的資産価値測定の困難さにのみあるのだろうか。むしろ評価対象としての「人間」概念そのものの〈儚さ〉、そこにありはしなかったか。我われはフーコーの主張から、そうした示唆を読み取るものである。

図表7-4 「人的資源会計(human resource accounting)」使用頻度の変遷



93) <http://readingmonkey.blog45.fc2.com/blog-entry-538.html>

94) 青柳文司, 『アメリカ会計学』, 中央経済社, 1986年, 140頁。

95) 上掲書, 536~537頁。

人的資産価値の測定が、真に必要なであったならば、「測定の困難」や「測定の不正確性」など物の数ではあるまい。「必要は発明の母」だからである。じっさい、会計において測定されている数値に、直接的測定によるものなど存在しない。会計測定はもとより、「測定はすべて規約的測定である」というのが、デバイン (C. T. Devine) の結論であった。デバインの説は、つとに1966年の昔に表明されている。我われはデバイン説に賛同する<sup>96)</sup>。

それにしても、会計学における「人間」概念への注目は、一般的思潮（哲学）に比べて、遅くやってきて、早く立ち去ろうとしているかに見える。会計学における「人間」概念への注目は、あまりにも短い期間だった。そのように論評しえよう。

それはともかく、フーコーが言うには、近代の規律権力が包括的で持続的なものであるためには、エクリチュール（文書）の使用が必須という。会計におけるエクリチュールとは、いわゆる「取引の帳簿記録」や会計基準などに他ならない。会計帳簿をもとにした「アカウントビリティ」（説明責任）の強調も、近代の規律権力に至って特徴的な現象だと言えよう。フーコーによれば、規律権力社会では、「ルールの追加」が果てしなく続けられると強調されている<sup>97)</sup>。たしかに、昨今、会計基準書はやたら分厚くなる一方である。すると、会計基準策定におけるいわゆる「細則主義」（rules-based approach）<sup>98)</sup>も、近代に特有の現象ということになろう。

## 6 現代の会計理論と権力

第二次世界大戦のあと、古典的自由主義は、ケインズ主義と新自由主義とに分岐した。ケインズ主義の国家理念は福祉の統治であった。言わば、政治が経済をリードする形態であった。それは、理想を現実に合わせてようとする企てであった。これに対し、新自由主義の国家理念は、飽くなき自由競争を目指す。新自由主義の下では、言わば経済が政治をリードするようになった。それは、現実を理想に合わせてようとする試みである<sup>99)</sup>。

フーコーの権力概念で言えば、福祉の統治は近代の「規律権力」を行使し、新自由主義的統治は現代の「環境介入権力」を行使するものと見られよう<sup>100)</sup>。新自由主義統治の下では、企業の利益が国家の利益よりも優先される。じっさい、欧州連合(EU)で利得を得たのは、国家・

---

96) 全在紋, 「会計測定論への形而上学的接近」, 『桃山学院大学経済経営論集』, 第20巻第1号, 1978年6月。

97) ミシェル・フーコー (慎改康之訳), 『精神医学の権力』, 筑摩書房, 2006年, 69頁。

98) 「細則主義」の対概念は「原則主義」(principles-based approach) である。

平松一夫・徳賀芳弘編著, 『会計基準の国際的統一』, 中央経済社, 2005年, 52~53頁。

99) 箱田, 前掲『フーコーの闘争—統治する主体の誕生』, 124~136頁。

100) 佐藤嘉幸, 『新自由主義と権力』, 人文書院, 2009年, 67頁, 80~82頁, 109頁。

国民ではなく、企業であるとの意見も存在する<sup>101)</sup>。

世にいうグローバリゼーション (globalization) は、国際資本の完全移動性実現を目指すものである。新自由主義は、そうしたグローバル資本主義がもたらした状況にはかならない。現代の権力者とは、新自由主義で益するグローバル資本家のことを指すといつてよい。グローバリゼーションは、人類の進歩による自然の〈成り行き〉でもたらされた現象ではない。現代の権力者に存する〈戦略〉により生み出された現象、と見なければならぬ。

周知のとおり、1990年代のバブル崩壊に際して、日本では金融機関をはじめとする大企業に向けて、「公的資金」という名 (コトバ) の『税金』が投入された。その意味するところは、強者 (大企業) ばかりが救済され、そのツケはすべて弱者 (一般国民) が負うというものであった。

バブル崩壊後、日本では「失われた20年」と呼ばれる長期のデフレ停滞が続いた。その後、2013年末以来のアベノミクスにより、「日本経済はようやくデフレを脱した。」そのように囁き向きもある。が、昨今の「法人税引き下げ」・「消費税引き上げ」は、強者救済・弱者切り捨ての再現にしか見えない。世は新自由主義的統治が深化するばかりに見える。

経済学者の見るところでは、新自由主義 (グローバル資本主義) が強請する時価会計は、未来および弱者からの取奪である。水野は言う。「一九九〇年代に世界的な流れとなった時価会計とは、時価の数字がそのまま決算に反映されるシステムなので、『将来、これぐらいの利益を稼ぎ出すだろう』という投資家の期待を織り込んで資産価格が形成されていきます。そのとき、マーケットというのは、その将来価値を過大に織り込むことで、利益を極大化しようとしますから、結果的には、将来の人々が享受すべき利益を先取りしていることとなります。……時価会計は将来の人々の利益を先取りするのみならず、バブルが起きれば、弾けたときに巨額の債務が残るので、巨額の税負担の増加という損失をも先送る結果となってしまうのです。』<sup>102)</sup>

読みの深さに驚かされる。この種の時価会計論 (公正価値会計論) が会計学者たちの中から聞こえてこないのは、なぜだろうか。もし、我われの寡聞 (知らないだけ) にすぎないならば、かえって幸いである。引用文中の「決算に反映されるシステム」という文言について、「決算 = 会計 = 企業の言語の体系 (システム)」と推論 [換喩 (メトニミー)] してゆけば、この経済学者の時価会計論は我われの会計言語論と連係する。昨今の制度会計 (法制会計) が、世界的に「資産負債観」すなわち時価評価重視に傾斜しつつあることは、ここで想起されてよい。

ケインズ主義から新自由主義への移行は、会計規範にも転換をもたらしたと見られる。プロ

101) 川口マローン恵美、『住んでみたドイツ』、講談社、2013年、96～97頁。

102) 水野和夫、『資本主義の終焉と歴史の危機』、集英社、2014年、177～178頁。

ダクト重視の会計基準から、ファイナンス重視の会計基準への移行である。1975年以來、会計基準の国際的統一が模索されてきた。この流れの中で、各国の会計基準は相互にかなり調和(接近)してきたかに見える。しかし、いまだ、国際的統一までは実現していない。

会計基準のあり方については、収益費用観と資産負債観の対立がある。両者も会計における言説の違いである。相対的に見れば、日本の会計基準はいまだ収益費用観の色彩が濃厚である。プロダクト重視的な会計基準である。アメリカの会計基準や国際会計基準は資産負債観の色彩が濃厚である。ファイナンス重視的な会計基準である。

歴史的には、収益費用観は資産負債観の〈アンチテーゼ〉として提示された<sup>103)</sup>。兩種会計観が公的な文書として最初に現れたのは、FASBにより1976年に公表された討議資料『財務会計および財務報告のための概念フレームワークに関する諸問題の検討：財務諸表の構成要素およびそれらの測定』(*An Analysis of Issues related to Conceptual Framework for Financial Accounting and Reporting : Elements of Financial Statements and Their Measurement*) [以下、「FASB1976年『討議資料』」と略称する]であった。

ここで注意しなければならないのは、まず収益費用観が存在していて、その後に資産負債観が発明されたのではない、ということである。資産負債観は収益費用観なしには存在せず、収益費用観また資産負債観が存在してこそそのもの、と理解するのが正鵠を得た見方である。両者の関係も、「会計におけるAとノンA」の関係である。

前拙著において解説されたように、複式簿記(A)でないものが単式簿記(ノンA)であり[逆もまた同じ]、発生主義(A)でないものが現金主義(ノンA)である[逆もまた同じ]という、それと同じ関係である<sup>104)</sup>。したがって、収益費用観とは非資産負債観の謂であり、資産負債観は非収益費用観の謂であるという、関係になる。

FASB1976年『討議資料』において、資産負債観は収益費用観よりも望ましい会計基準として提示された。資産負債観と収益費用観は、同時に発明され提示された会計基準観と言ってよい。「収益費用観」(revenue and expense view)というコトバは、「資産負債観」(asset and liability view)というコトバがなければ存在しえなかった概念なのである。

ただし、我われによれば、資産負債観という会計言説と収益費用観という会計言説は、同種エピステーメーに内属する言説間の対立ではないと見られる。仮に、「資産負債観」という会計基準(言説)が現れる以前の、当時の一般的な会計実務を支える会計基準(言説)を「収益費用観」というコトバで代理させよう。その「収益費用観」が規律権力型言説であったとすれば、「資産負債観」と呼ばれる会計基準(言説)は環境権力型言説であると見られる。私見では、

103) 八重倉孝,「収益費用アプローチ」, 神戸大学会計学研究室編,『第六版 会計学辞典』, 同文館, 2007年, 631頁。

104) 全在紋, 前掲『会計言語論の基礎』, 262頁。

兩種言説は、それぞれ異種エピステーメーに帰属する権力闘争間言説と見られる。そして、近時における会計理論のエピステーメーは、規律権力型（収益費用観的言説）から環境権力型（資産負債観的言説）への移行期にあたっている可能性が高い。そのように見られる。

他に、相互に異なる会計言説の例として、商品勘定の処理については「分記法」と「総記法」の差異がすでに存在していた。両者の最大の相違は、総記法の場合、売上商品原価と販売益とを分記する手数が省けた。同種商品を多数回かつ多量に購入・販売する業種には、今も利便である。また、決算手続については「大陸法」（大陸式決算手続）と「英米法」（英米式決算手続）の差異がすでに存在していた。両者の最大の相違は、「残高勘定」を設けるかどうか、という点にあった。「分記法」と「総記法」の対立、あるいは「大陸法」と「英米法」の対立などは、「資産負債観」という上位クラス会計言説が出現する以前の、共に規律権力型エピステーメーに内属する下位クラス会計言説間の差異であった。

前述したように、現代の環境権力は、被支配者統治上の便宜のために、人間の環境をしきりに統計データ化する。繰り返しになるが、フーコーによれば、「知」と「権力」は〈一体〉であると見られた。会計の領域において、「現代の権力」と一体をなす「知」にかかわる研究としては、どのようなものが考えられるであろうか。

確率・統計を駆使してなされる所謂「実証研究」（empirical research）などは、その象徴例と言えよう。じっさい、藤井の分析でも、米国でも日本でも、「実証研究が今日の会計研究の主要潮流になっているということだけは、……議論の余地のない事実として確認することができるであろう」とされている<sup>105)</sup>。欧米における会計研究は、70年代から実証研究がその主流となっていた<sup>106)</sup>。会計研究においてアメリカの影響が甚大な韓国会計諸学会でも、近年は実証研究報告のオンパレードである。

会計を企業の言語であると見れば、言語（記号）の研究においては、基本的に3つの要素が識別された。記号・記号の指示物（「事物」）・記号の使用者である。記号と記号のあいだの関係を研究するのが構文論（syntactics）、記号とその指示物との関係を研究するのが意味論（semantics）、記号とその使用者との関係を研究するのが語用論（pragmatics）であった。ただし、構文論・意味論・語用論（実用論）という3つの部門の識別は、「明確な別々の区分ではなくて、意味に関する議論をはっきりさせるための便宜上の分類」<sup>107)</sup>にすぎない。

記号・記号の指示物・記号の使用者という3つの要素、それらすべてに関与するのが語用論（実用論）、これから使用者を切り離して主として記号と記号の指示物との関係を扱うのが意味

105) 藤井秀樹、『制度変化の会計学』、中央経済社、2007年、165頁。

106) 太田浩司、「解題（特集 利益調整研究の新展開）」、『証券アナリストジャーナル』、第51巻第5号、2013年5月、2頁。

107) A.J.エイヤーほか（市井三郎ほか訳）、『コミュニケーション』、みすず書房、1957年、80頁。

論、そして更にはその中から記号の指示物との関係を切り離して記号間の関係だけを扱うのが構文論、という包含関係となる。したがって、語用論（実用論）が、抽象度のもっとも少ない言語理論ということになる<sup>108)</sup>。

上で指摘したとおり、ソシュールとフーコーにおける言語観は、意味実体論を排し、意味関係論で共通している。そして、両者の言語論は、共に語用論を視野に収めて展開されている。ただし、語用論には「語彙語用論」と「言説語用論」の別がある<sup>109)</sup>。前者がソシュールの語用論であり、後者がフーコーの語用論である。

ついでながら、企業会計における各社の「当期純利益」は、ほんらい〈単数〉か〈複数〉か？

「当期純利益」こそは企業会計における最終的な「真理」であり、フーコーによれば、その真理は知（識）として権力と一体であった。当該「当期純利益」を単数とみるのは意味実体論である。その利益観は、中世から近現代に至るまでの一般的な経営理論の基調である。

ソシュールやフーコーによる意味関係論からすれば、「当期純利益」は複数と見られる。彼らの言語観をベースに「当期純利益」の意義を探れば、収益費用観における当期純利益と資産負債観における当期純利益との間に、優劣の差は存在しない。

閑話休題。会計において確率・統計を分析ベースとした実証研究は、いかにも〈客観的〉に見える。「客観」の対義語は「主観」である。会計を企業の言語（記号）とみる立場から言えば、客観性を重視した実証研究とは、記号（確率・統計値）と記号の指示物（確率・統計値の指示対象）との関係において、可及的高度な写像性（いわゆる「透明性」）をめざす意味論的な考察である。言いかえれば、主観を離れたところでの、意味論的な客観的真理を追究する考察である。すなわち、会計における実証研究においては、記号の使用者（主観）という要素が捨象されている。

アリストテレス以来、この世界には、主観と離れた客観的真理が存在すると考えられてきた。しかし、構造主義をはじめとする昨今の認知意味論は、「人間の主観から離れた所に客観的な真理があるとする考え方を否定し、世界のあり方は時と場合により人により異なる、と考える。」<sup>110)</sup> たとえば、天動説から地動説へ、あるいはニュートン力学からアインシュタイン相対性原理へ、といった「真理の変転」を思い起こせば、明らかである。アリストテレス説にもかかわらず、歴史でまみえる〈真理〉は不動でない。移ろいやすい。

私見によれば、制度としての会計における記号の使用者こそ、フーコーのいう「権力者」に他ならない。もともと、使用者がいてこそ記号である。使用者なしには、記号などはじめか

---

108) 太田朗・梶田優、『英語学大系 4 文法論Ⅱ』、大修館、1974年、42頁。

109) 児玉、前掲『ことばと意味』、45頁。

110) 宗宮喜代子、『ルイス・キャロルの意味論』、大修館、2001年、176頁。

ら存在しえない。会計における実証研究は、意味論（および構文論）にのみ目を奪われ、語用論（実用論）の視点が捨象されている。語用論あつての意味論（および構文論）である。このことを忘却していないか。その自覚もないままに、内容的に記号の使用者（権力者）である誰かに奉仕する、侍従的な考察に埋没していないか。

本稿第2節で述べたように、フーコーの言説分析では「語られているものばかりでなく、タブーや慣習上語れない（語られていない）もの、および『言外の意味』（conversational implicature）についての吟味も、重要な課題とされた。」フーコーの言説分析は、実証主義と鋭く対立する。なぜなら、目に見える具体的な行為や実態を絶対視しないからである<sup>111)</sup>。

言説とは、言明のスタイルや様式の秩序のことであった。実証主義を背景とする「実証研究」も、確率・統計を駆使した客観性重視の言明としてのスタイルや様式の秩序を構成している。それゆえ、「実証研究」も「言説」である。そもそもコトバ（言語）であるかぎり、語用論（実用論）と無縁な言語現象などありえない。会計が企業の言語であるかぎり、会計における実証分析（客観性重視）は、記号の使用者（＝主観＝権力者）を捨象している（語っていない）。かつ、そうした沈黙を顧みない点で、明らかにフーコーの所説をカバーしきれていない。

先述のように、現代の権力者とは、新自由主義で益するグローバル資本家である。その権力者も特定個人ではない、という意味で「匿名」である。匿名であるため、被支配者としての会計人には見えにくい。会計における主要潮流としての実証研究は、実は自らも気付かない（意識しない）うちに、当該匿名権力者に誘導されての流行にすぎないのではあるまいか。

会計における実証研究は、いったい誰のための考察か。「人類すなわちこの世のすべての人びとに役立つための考察」と想定するなら、それはナイーブな思い込みではないか。確率・統計を駆使した実証分析が、圧倒的多数被支配者（弱者）にとって、どのように役立つ（有益な）のか。我われには、空想することさえ容易でない。会計における実証研究は、ごく少数グローバル資本家以外の人びとにとっては、〈空振り〉でしかない営為ではないか。

会計における実証研究の流行また、人類の進歩による自然の〈成り行き〉ではあるまい。むしろ、権力者による秘められた〈戦略〉の所産であり、権力行使の〈手段〉と見るのが至当であろう。既述のとおり、確率・統計的な実証分析は、現代権力者のためにコスト・パフォーマンスを高める役割を果たすだけであろう。この点、自他ともに再考してみる価値がある。

収益費用観と資産負債観に並行しながらも、相互に交錯した関係をなす対立言説として、会計基準における「細則主義」と「原則主義」の交戦もある。現代会計における権力論を閉じるにあたって、この点についても補記しておこう。

会計基準書の相対的ボリュームで言えば、細則主義は相対的にルールが多い。原則主義は相

111) 見玉徳美、『ことばと論理』、開拓社、2008年、173頁。

対的にルールが少ない。現状では一般に、日本やアメリカの会計基準は細則主義であり、国際会計基準は原則主義である、と見られている。

ただ、細則主義が規律権力型であるとすれば、それは収益費用観と同調しやすい。他方、環境に介入して例外を認めない原則主義<sup>112)</sup>が環境権力型であるとするならば、それは資産負債観と同調しやすい。会計基準の精粗においてもまた、会計理論におけるエピステーメーとして、現在は規律権力型から環境権力型への移行期にあたっている可能性が高い。

フーコー権力観に依拠して制度会計の動向を予測するとすれば、どうなるであろうか。紆余曲折はあっても、日米の細則主義は、いずれ国際会計基準の原則主義に収斂してゆくのではないか。そのように予見される。ただし、そうした予見が仮に当たったとしても、フーコー的には「進歩」とは認められない。ダーウィニズムの進歩史観は、フーコーの否定するところだからである。

以上に照らして、私見の総括をここに表明しよう。フーコー権力史観を支えるエピステーメーの変遷論は、会計理論の変転においても十分に〈検証〉されうる。

## 7 むすび

以上の小考につき、我われなりの結論を要約して示せば、次のとおりである。

- (1) エピステーメーを支える言語観について言えば、フーコーにおいてルネッサンス期（中世）は「類似」とであるとされた。会計学説史的には、いわゆる「人的勘定学説」（擬人説）が、この言語観に重なるであろう。パチョーリの『スムマ』における貸借関係の解説は、初期の人的勘定学説だったとする指摘がある。その通りとすれば、ルネッサンス期言語観についてのフーコー説は、会計学説史的にも裏付けられることとなる。
- (2) 人的勘定学説は、勘定を人と人との関係として見る。物的勘定学説は、勘定を物と物との関係として見る。斯学の通説では、物的勘定学説こそが「本来の勘定理論」であり、「経済的事実」に即した科学的な会計理論であるとされる。物的勘定学説は人的勘定学説を「擬制」理論でしかないと批判する。しかし、ソシユール言語学的には、物的勘定学説も言語システマ的には擬制に立脚した意味実体論でしかない。
- (3) フーコーによれば、近代は「人間主義のエピステーメー」の時代である。認識や学問の〈客体〉としての人間概念は、近代にのみ特有の発想でしかない。人間を中心的課題にする象徴的な会計研究事例は、「人的資源会計」論であろう。斯学において人的資源

---

112) 山田辰巳、「第3回ASBJオープン・セミナー IFRSの最新動向と我が国への導入 IFRSの今を説く」、『会計・監査ジャーナル』、第663号、2012年11月、55頁。

会計研究が進展しなかったのは、人的資産価値測定の困難さにもまして、人間概念の儚さにはしなかったか。我われがフーコー説から得た示唆である。

- (4) 現代の管理権力は、統治上の便宜のために人間の環境をしきりに統計データ化する。それと軌を一にして、欧米でも日韓でも、確率・統計を駆使してなされる「実証研究」が、会計研究の主要潮流となっている。「知」としての会計学が、無自覚のうちに現代権力に奉仕している象徴例と言えよう。実証研究の流行は、人類の進歩による自然の〈成り行き〉ではあるまい。それは権力者による秘められた〈戦略〉の所産なのである。
- (5) 近代の規律権力は、何ごとにもエクリチュール（文書）化することで権力の維持を図る。会計理論的には、収益費用観や細則主義に通じている。現代の環境権力は、被支配者たちをある種き遣いの少ない安全システムに落とし込んで経済効率を高め、権力の維持を図る。会計理論的には、資産負債観や原則主義に通じている。人類の進歩かどうかとは関係なく、フーコー的には日米の会計基準とも国際会計基準に収斂していくであろう。
- (6) フーコーは、権力と一体をなす知（真理）の枠組みを、「エピステーメー」と呼んだ。エピステーメーについて、彼は考古学的に4つの時代を抽出した。①ルネッサンス（中世）期、②古典主義時代、③人間主義的時代（近代）、④今後到来が予想される現代、である。フーコー権力史観を支えるエピステーメーの変遷論は、会計理論の変転においても十分に〈検証〉されうるところである。これが我々の総括である。

（了）

（2014年11月19日受理）

## Foucault's Power Theory and History of Accounting Theories

CHUN Jae Moon

The conclusions reached in this paper are summarized as follows:

- (1) In regard to the linguistic view in the background of *épistémè*, Foucault asserts that it was *ressemblance* in the medieval period. This linguistic view seems to overlap what is called the "personalistic theory of accounts" (personification theory). There is an opinion that the explanation of debit/credit relation in Pacioli's *Summa* was an early personalistic theory of accounts. If this opinion is right, Foucault's theory concerning the linguistic view in the Renaissance period will be supported by the theory of accounting history.
- (2) Personalistic theories of accounts take the view that accounts are the relation of person and person. Materialistic theories of accounts, on the other hand, take the view that accounts are the relation of material and material. In the popular opinion of accounting schools, materialistic theory is a "proper theory of accounts" and a scientific accounting theory in line with economic facts. Materialistic theories of accounts criticize personalistic theories of accounts to be simple rhetorical theories. However, based on Saussurian linguistics, materialistic theory is just the theory of meaning as substance and only a rhetorical doctrine too.
- (3) According to Foucault, modern society is in the age of "*épistémè*," which stresses "the principle of human beings." He asserts that the concept of "human beings" as an 'object' of learning is only a peculiar idea in modern society. A symbolic accounting example seems to be "human resource accounting," which studies human beings as a central theme. Research into human resource accounting has not developed in accounting schools. That is because the vanity of the concept of "human beings" is much bigger than the difficulty in measuring the value of human resources. This is a suggestion we have obtained from Foucault.
- (4) Contemporary management power frequently interprets the human environment as many kinds of statistical data to more conveniently govern those people who are ruled. In line with this trend, "empirical research," which extensively uses probability and statistics, has recently become the mainstream in accounting research in Europe, the

US, Korea and Japan. This symbolizes the fact that accounting theories as intelligence serve contemporary power *unconsciously*. This remarkable trend of empirical research does not seem to be the outcome by human progress; it is just the result of the hidden strategy of contemporary power.

- (5) Modern disciplinary power plans the maintenance of power in everything by writing down rules (*écriture*). This leads to the revenue and expense view or the rules-based approach in accounting theories. Contemporary environmental power plans the maintenance of power by raising efficiency through a safety system which relies on a lesser amount of fear in a sense. This leads to the asset and liability view or the principles-based approach. According to Foucault's discourse, the U.S. accounting standards and Japanese accounting standards will come close to the International Financial Reporting Standards (IFRS), regardless of whether or not human progress is achieved.
- (6) Foucault called the framework of knowledge (truth) which is united with power "*épistémè*." Concerning *épistémè*, he archeologically identified four ages: ① the Renaissance period (the Middle Ages), ② the Classical period, ③ the Modern period, and ④ the Contemporary period, which is expected to arrive in the future. The change in *épistémè*, on which Foucault's power theory is based, is fully verified in the historical transition of accounting theories.